



Title	狩猟塔トーレ・デ・ラ・パラダの絵画装飾研究 : 16, 17世紀のスペイン宮廷における君主教育と宮廷絵画ディエゴ・ベラスケスとの関連から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山田, のぞみ
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12803号
Issue Date	2017-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66638
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Nozomi_Yamada_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 山 田 の ぞ み

学位論文題名

狩猟塔トーレ・デ・ラ・パラダの絵画装飾研究—16、17 世紀のスペイン宮廷における
君主教育と宮廷画家ディエゴ・ベラスケスとの関連から—

1) 本論文の観点と方法

マドリッド郊外にあるスペイン王家の狩猟の際の休憩所トーレ・デ・ラ・パラダ（以下「トーレ」）は 170 点を超える絵画によって装飾されていた。その内の約 110 点がフランドルの画家ルーベンスとその工房の作であるが、本論文は、スペイン・バロック期の巨匠ベラスケスがこのトーレのために数としては相対的に少ない 11 点の作品を単に制作しただけでなくキュレーターの立場に関わり、他の画家の手になる作品との間に生み出される意味の連関を意識していたこと、またそれによりトーレの装飾があるまとまった教訓的メッセージの表現となるよう意図していたことを明らかにしようとする。すなわち、トーレ全体に絵画装飾プログラムを想定することができ、それは具体的にはフェリペ 4 世の息子であるバルタサル・カルロス皇太子が善き君主となるために資するものであったことを、作品の図像的な分析を行いつつ論ずるものである。

本論文は、図像プログラムを解明するために必須の同時代資料との比較において、文字だけの文献ではなく、文字とイメージからなるエンブレム・ブック（主にセバスティアン・デ・コバルービアスの『道徳的エンブレム』とディエゴ・デ・サアベドラ・ファハルドの『百のエンブレム』で表された政治的キリスト教君主の理想）を広範に参照していることが特に注目される。それにより、君主教育に関する文献とベラスケス作品との意味内容における符合を指摘するのみにとどまらず、16 世紀から 17 世紀にかけてイメージの果たす役割が変化してゆくことを明らかにし、その中でトーレの装飾を歴史的に位置付けようとする点で新しい試みとして評価することができる。

2) 本論文の内容

第一章では、トーレの建築類型と機能の分析を行う。トーレは基本的には「塔」であるが、建造時から Atalaya（望楼）と呼ばれていた。この語は 16・17 世紀には高みから真実を見ることを含意し、さらには視覚の重要性や君主の統治と結びつけられた。それゆえトーレは建築の点からも、次章以下で検討される絵画による君主教育の場として相応しかったといえるのである。

第二章から第五章までは、トーレのベラスケス作品 11 点が関連する他の美術作品や同時代資料とともに分析される。まず第二章ではトーレの主要な居室である「王のギャラリー」に並べられていたバルタサル・カルロス皇太子とその父フェリペ 4 世、そして王の弟で皇太子の叔父であるフェルナンド枢機卿親王の 3 名の肖像が取り上げられる。皇太子は銘から 6 歳の年であることが分かり、もはや宮廷の女性たちによってではなく、アエネアスの息子アスカニウスと同じく父と叔父（アスカニウスにとってはヘクトル）を模範として学ぶ年になっていたことが示される。そしてバルタサル・カルロス皇太子の教育において、人文学的な知識や枢要徳の修得だけでなく、オティウムにおける狩猟術の教えが重要であったことが示唆される。

第三章では、トーレ二階第八の間に置かれた《イソップ》がしばしばそう描かれるような醜い相貌を示しておらず、ベラスケスがその写実性を遺憾なく発揮して当時のピカロ（小悪党）に似せていながらも、書斎の聖ヒエロニムスやペトルカなど思慮深い知識人のタイプとして描かれていることを指摘する。その理由としては、イソップ寓話とその道徳的内容から君主教育において有用であっただけでなく、「例証・範例 *exempla*」による論証や「簡潔さ *brevitas*」といったイソップ寓話にみられる優れた修辭的技法によっても評価されていた点を挙げる。こうした技法は、

タイトルやピクチャーにより瞬間的な知の伝達を目指すエンブレム・ブックの構造と比較することができる。またイタリアに多くの先例がみられるイソップ寓話の図像の系譜をたどることにより、それらが個別の倫理的な規範を示すだけでなく、ある普遍的な歴史観や世界観をあらわすことができ、それゆえトーレにはふさわしい題材であったことを指摘する。

第四章では、まず第七の間「王のギャラリー」にあったフェリペ4世の狩猟場面を描くスネイエルス²の2作品が取り上げられ、そこにはコバルービアスの『道徳的エンブレム』等にみられる「活力 brio」に対する戒めと「活力」を抑制する「賢明 prudencia」への評価が読み取られるべきことが明らかにされる。また前章で取り扱ったベラスケスによる《イソップ》は、古代ギリシアの哲学者《メニッポス》像とともに、ルイス・ビーベスの『学問論』において「賢明」の源であると考えられていた「経験的な知」を表すものと理解される。加えてこの二人の肖像と同じく第八の間に置かれていたヨールダンスの《テティスとペレウスの結婚》も、やはりビーベスによれば「賢明」の源とされる「判断力 judicium」の重要性を示している。これらの作品はいずれも、君主の備えるべき徳である「賢明」によって結びつくのである。

第五章では、トーレ二階第一の間に置かれていた4点の道化の肖像が、その身体的特徴に関心が向けられるよりも、滑稽な言動をするという一芸に秀でた者として、またそれとともに真実を語る者として描かれていることが示される。アルカーサル宮では道化とともに宮廷の家臣たちの肖像が飾られていた。それと異なりトーレでは、道化たちは寓意的な意味を持つ動物の像と並べられており、サアベドラが『キリスト教的政治的君主の理想』で述べるように、トーレの道化はお世辞や追従ではなく、主君を楽しませつつ真実を述べる者として評価されるべき存在だったのである。

第六章では、ベラスケス作品から一時離れ、ブエン・レティーロ宮にスルバランによって描かれたヘラクレスの連作と、トーレー階第二の間に置かれたルーベンス工房によるヘラクレス3場面が対比される。前者は、フェリペ4世の地上における武勲を、ヘラクレスの剛毅の徳に基く偉業によって象徴的に称えたものと解釈できる。それに対してトーレにおいてヘラクレスは、歴史的出来事に関連付けられるのではなく、普遍的な教訓を示す統治者の鑑となっている。第二の間には同じくルーベンス工房による別の3点の神話画があったが、当時よく知られていた『変身物語』のスペイン語注釈本を用いて解釈すると、これらはちょうどヘラクレスの3点と対を成し、君主の避けるべき悪徳を示していることがわかる。またこの結論により、この部屋の元々の作品配置が説得力をもって示される。

第七章では、16・17世紀の君主教育に関する書物の分析がなされ、テキストだけでなくイメージが重視されるようになる変化が跡付けられる。エンブレム・ブックはその到達点であり、トーレの絵画装飾を理解するうえで大きな手掛かりとなるサアベドラの著作では、君主教育における造形芸術の重要性や君主の統治における「眼」や「監視」の比喻について述べられている。こうしたイメージや視覚への関心の広がり、絵画館としてのトーレが出現する背景となったことが示される。また、16世紀から17世紀にかけて版が重ねられた古代の著述、フィロストラトスの『イマギネス』がトーレの倣った具体的な先例として挙げられる。

最後に、参考文献一覧と関連資料集などからなる資料編が設けられており、今後のトーレ研究の便宜に資するものとなっている。